

平成 21 年度  
(岡山県水産試験場) 試験研究課題評価票 (概要)

< 事後評価 >

凡例 5 : 著しい成果が得られた 4 : 十分な成果が得られた 3 : 一定の成果が得られた  
2 : 見込んだ成果を下回った 1 : 成果が得られなかった

課題名	安全・安心岡山カキの開発研究				
総合評価	5 : 2人	4 : 3人	3 : 人	2 : 人	1 : 人
助言・指摘事項等	<p>・腸炎ビブリオ菌に対して 29 種中 4 種, ノロウイルスは 12 種中 1 種の機能性植物が有効としたが、前者の粉末試験で結果が不安定であったとも述べられている。周辺条件のばらつきを排除し、規格化した阻止円の標準手法にまで近づける努力が必要と思われる。</p> <p>・調理に欠かせない香辛料やハーブを用いたカキの浄化技術は、消費者にとっては安心感の高いものである。一日も早い実用化を望む。</p> <p>・実験的効果を得た後の実用化に向けて、浄化装置や設備の規模とコストの検討、方法の確立などを同時進行的に進めてほしい。浄化したカキの出荷形態(殻付・剥き身)ごとの経済効果シュミレーション</p> <p>・過去にもノロウイルスの問題があり、食の安心、安全の面からも良い研究テーマだと思います。また、一定の成果を得られたことは評価できると思います。</p> <p>・本研究は、岡山県の内海水産業育成の上で、また、消費者の立場から、重要な課題であり、その成果は高く評価される。</p> <p>本研究で開発された方法の有効性をさらに明確化して信頼性を高めることが必要であり、ノロウイルスの検出委託費は高価であるが、データの数をできうるかぎり増やす研究をさらに推進され、ぜひ、実用化に漕ぎ着けていただくことを、今後の課題として期待したい。</p>				

課題名	海のゆりかご(藻場)拡大事業				
総合評価	5 : 人	4 : 3人	3 : 2人	2 : 人	1 : 人
助言・指摘事項等	<p>・確実な種子保存条件や簡易播種法を確立し参加者を漁業者・NPO に拡大させた。今後の展開に対する見通しも堅実で、報告書(要約)では省略されたが、20 年前と比べた改善状況も端的に示されている。光合成環境の改善で定量的に説明できることを立証したことも評価される。</p> <p>・藻場再生の実用化とともに、アマモ場の回復要因である海水の透明度の上昇を目指した住民への生活排水などの改善指導も必要であると感じられる。</p> <p>・獲得した復活藻場の自然環境化での維持・拡大技術開発と環境整備の取組が必要</p> <p>再生に向けての社会的取組の確立・漁業者が行う漁場環境改善に資する補助事業としての取組の可能性追求</p> <p>・水産資源全般から見ても藻場拡大は必要不可欠だと思います。特に一定の成果も得られました。環境問題とも関係もあるので長期にわたり調査、研究をお願いします。</p> <p>・瀬戸内における水産漁獲量の減少トレンドには、産卵、稚魚成育の場としてのアマモ場の分布域とその面積の減少との間に深い相関があると考えられ、本研究課題は基本的に重要である。ただ、近年の回復傾向に対して、透明度の問題が論じられているが、透明度の増加は、藻場の拡大につながっても、それは動植物プランクトンの減少によるものであると考えられるので、過去の研究諸資料をもとに、生態系の視点からの取り組みも並行させ、藻場の縮小の原因を明らかにし、回復のための手がかりが探られることが望まれる。</p>				

課題名	冷水病に強いアユを増やそう事業				
総合評価	5 : 人	4 : 2人	3 : 3人	2 : 人	1 : 人
助言・指摘事項等	<p>・事業期間に冷水病はなかったが、アユ漁獲高はほぼ単調に減少している。他の要因、例えば、付着藻類量・分布の調査は必要ではなかったか。また、93年水温とどの程度違うのか、データは皆無でないと思われる。さらに、前・後半の研究は総合的に行うべきであったと考える。</p> <p>・今回の調査結果および実験結果が漁業者に普及し、冷水病に強いアユが増えることを望む。</p> <p>・河川環境改善を進めるとともにこの手法により、冷水病による資源の減耗を防ぎ、漁獲量を回復させて内水面漁業の収益が増大することが今後、第5種共同漁業権の行使を円滑にし、漁協の経営体質も強化されると思われる。</p> <p>・冷水病に強い鮎の成果は得られたと思いますが、放流効果が得られたのかがよくわかりませんでした。また、溯上調査も3河川同じ年での比較が良かったと思います。</p> <p>・本研究は、内水面漁業における深刻な問題であるアユ漁獲量の減少の現象に解決の糸口を明瞭に与えたという点で、高く評価される。今後は、冷水病耐性の高い系統の種苗生産の普及活動とともに、並行して、モニタリングにおいても普及活動を発展・継続させることが必要であろう。なお、アユの漁獲量の変遷を過去の河川水の水温・水質の季節変化（上水場などに河川水温データが蓄積されている）と比べるなど、冷水病以外の漁獲量減少の原因を探る作業は（その成果が明示されていないので）残されていると考えられる。</p>				